

3 夢ある建築家への磨き

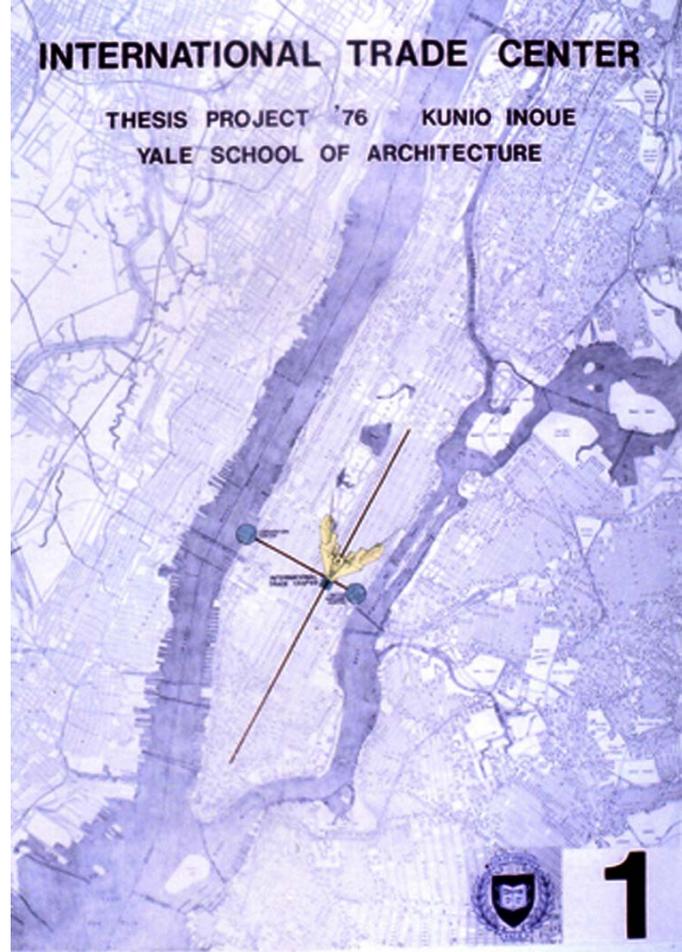
3.3 “I have a dream!” 大学院の卒業設計

私の卒業設計は、ニューヨークのマンハッタンの中心地にある、「ペンセントラル鉄道会社」が所有する、グランド・セントラル・ステーションとその12の都市の区画であった。その空中権を利用して、世界一高い超高層ビルを建てようとする構想であった。建築家、ヒュー・ハーディーやフレッド・カーターの指導の下で設計を始めた。ニューヨークのデベロッパーや、構造技師のサポートも得た。

このグランド・セントラル・ステーションは、マンハッタン島を身体にたとえるとヘソの様な所に位置しており、ここを基点に、南北にパークアベニューが伸びている。又、42番通りが、東は国連の建物、西はタイムズスクエアを軸として伸びている。

バウハウスの学部長であったウォルター・グロピウスが、1960年に、このグランド・セントラル・ステーションの上に、60階建てのオフィスビルを設計した。その建て方は、都市の軸となるパークアベニューを空間的に完全に遮断して、その上に超高層ビルを建てたのである。このビルは、まるで巨大な墓石が聳え立っているかようであり、まったく南北の空間が切れてしまっている。

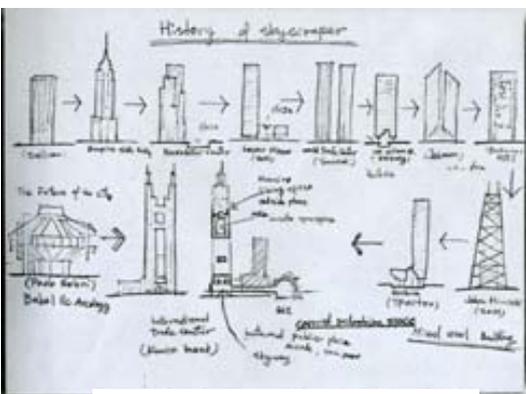
私はニューヨークで働いていた時、いつもこの周辺の設計事務所で働いていた。ニューイングランド地方からの電車は、このビルの地下に入る。ニューヘブンからニューヨークま



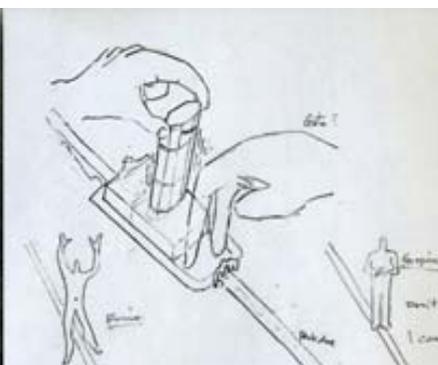
ニューヨークのマンハッタン島と
私のドリームプロジェクト



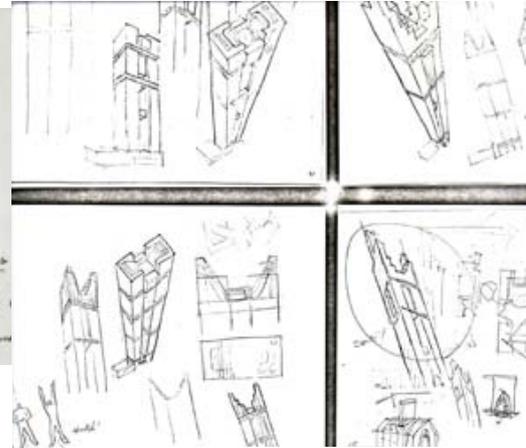
私の卒計のプロジェクトの敷地、パークアベニュー



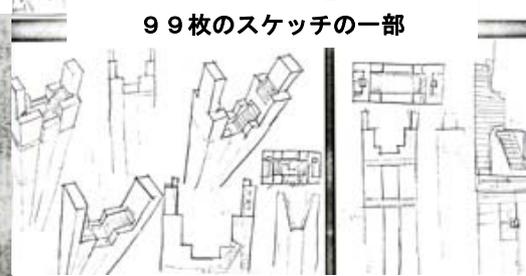
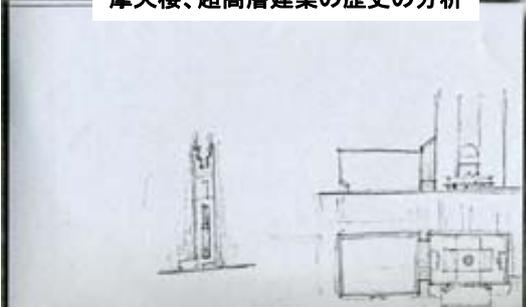
摩天楼、超高層建築の歴史の分析

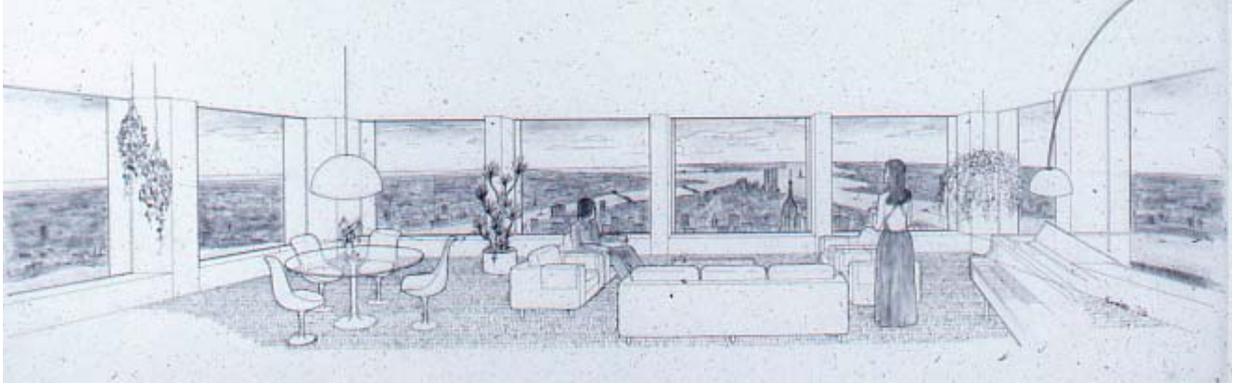


メタファーとしてのスケッチ、
これが最も大事なスケッチ



99枚のスケッチの一部

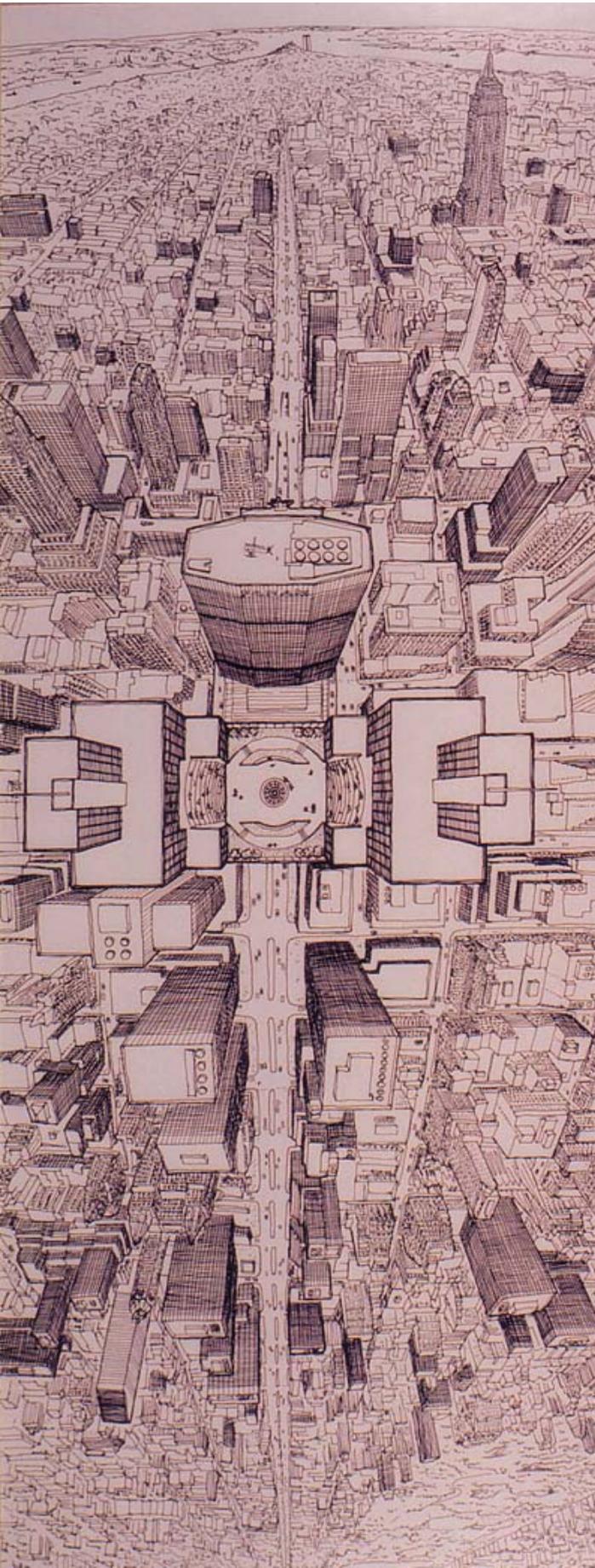




128階のリビングルームからのマンハッタンの眺望

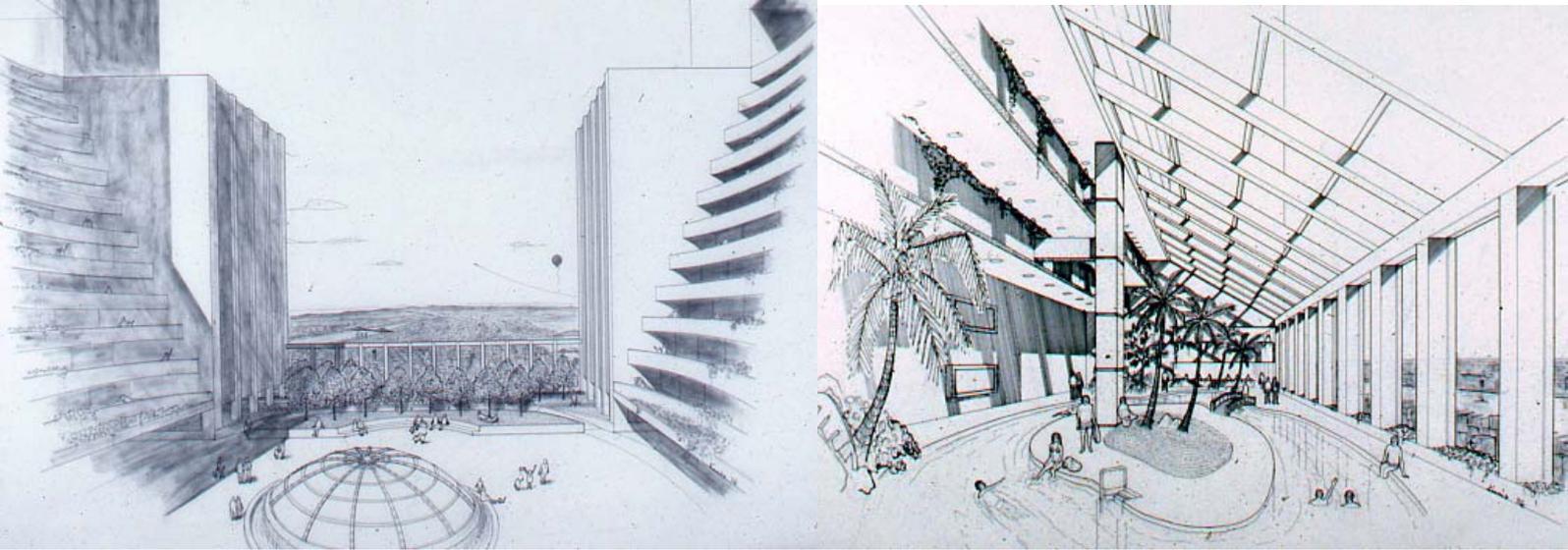
で仕事ももらいにきて、乗り降りした駅はこの駅であった。私のニューヨークでの生き方に、最も影響を与えてくれた地域あり、そして闘志に燃えていた若き建築家の修行の場であった。大学院卒業後、私はニューヨークにもどる気持ちはなかった。仮にもどることがあったとしても、一生ニューヨークで生活するつもりもなかった。だから、私の夢を、世界一高い超高層ビルを設計することでニューヨークに建築の夢を残しておきたいと思ったのだ。

私は、アメリカの摩天楼とよばれる超高層の歴史を勉強した。又、1940年代のシカゴの超高層ビルのコンペ、トレビューン・タワー等も調べた。私のニューヨークでの生活、思い出、建築家としての経験等のすべてを、この建物の中に入れ様と思った。その結果、このビルは、コマーシャル、オフィス、ホテル、マンション等を立体的に入れた複合建築物となった。巨大なプロジェクトである。私は空いた時間があると、いつもスケッチを描いていた。



128階建てのビルの真上からの私の鳥瞰図のドローイングを見ている

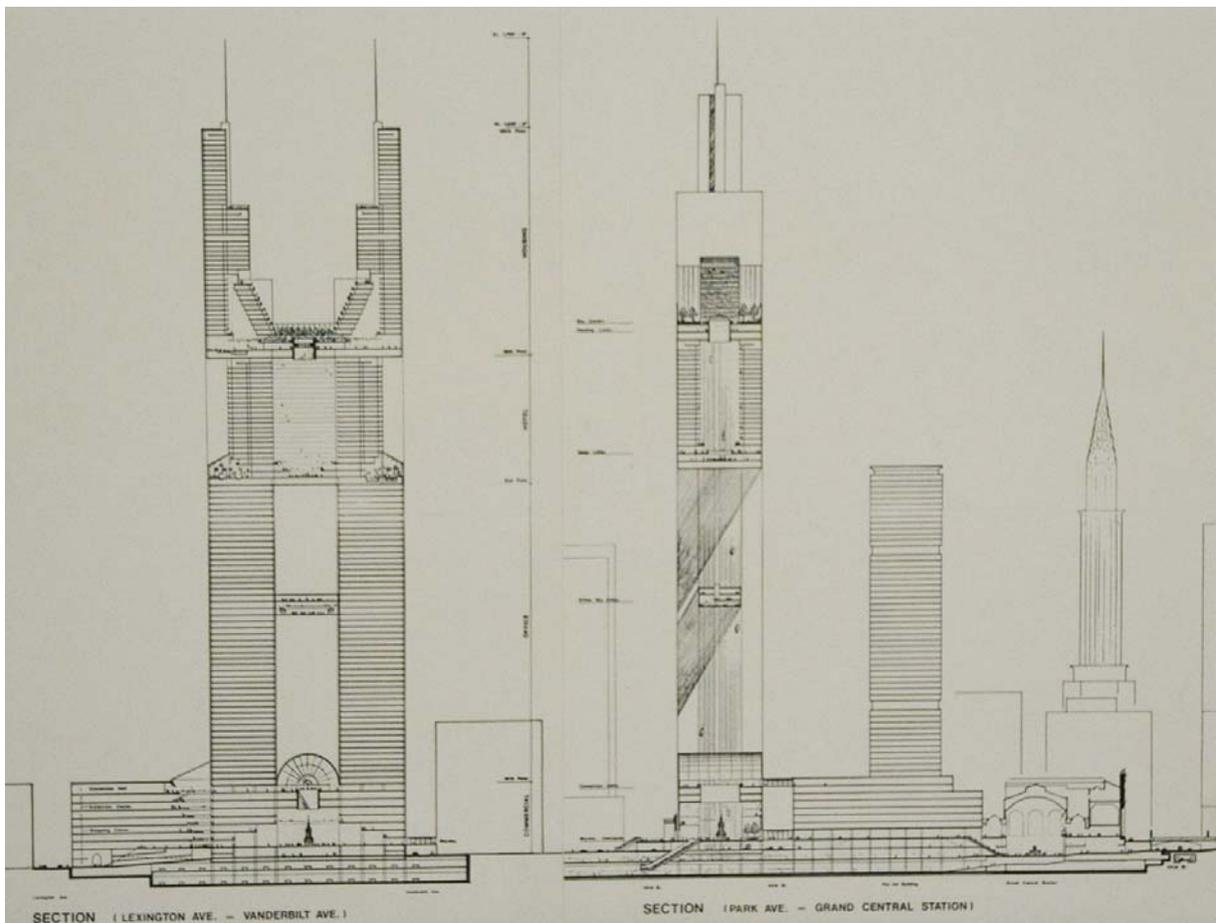




ハウジング、マンションの為に地上87階のスカイガーデン

62階のホテルの温室兼スカイスイミングプール

他の授業を聞きながらも、食事をしながらもこのプロジェクトの為にスケッチを描いていた。その区画の全体の空中権を利用して既存のビルの床面積を差し引き、この複合建築を設計してゆき床面積を計算すると128階建ての超高層ビルになった。グロピウスが設計したビルは、メタファー的に言うと、人間が腕組みして、軸となるメインストリートに立ちだかっているようなビルである。そして、意図的にマンハッタンの南北の主軸となるパークアベニューの空間を遮断しまっている。しかし、私の卒業設計のプロジェクトは、パリの凱旋門の様に建物に穴を開け、空間が抜けて、反対側が見える様に設計した。地上から2つに分けられていた2棟のオフィス部分ビルが60階まであり、そこから一体となる。61階から85階までのフロアはホテル部分とし、62階をホテルのロビーにし、25階分のホテルの吹き抜けの空間を創った。その上部には、スカイガーデンとよばれる外部空間を設け、再び2つのタワーに分け、マンション部分とした。そのマンション部分は段々上層に行くに従って小さくなり、ペントハウスとよばれる上層のマンションは360



東西軸@2棟オフィス、ホテル、マンションの断面図

南北軸@センター吹き抜けスペースの断面図

私の卒業設計発表会でドイツの著名な
建築家ハンスホラインと対話中、
私の夢のひとつを語り綴った時。
彼もドリーマーであった。

度見渡せて、地平線が丸く見える様な現代的な摩天楼をつくったのである。

つまり、人間が両足を広げ、両腕を高く伸ばし、背伸びをしているイメージなのである。このビルが都市の軸の中心に建てられても、空間が南北に遮断されることはなく、空間は抜けていることになる。私が構想したような、2つに分けてられているペントハウスのツインタワーのマンションは、マンハッタンのセントラルパークの西側、ニューヨークの古き摩天楼時代の建物に見られる。又、私が構想したようなツインタワーを、15年後、丹下健三が新宿の西口に建てた東京都庁舎である。又、シーザー・ペリーも世界一高い、私の構想と似た様な超高層のツインタワーを20年後にマレーシアに設計した。設計事務所 SOM は25年後に上海に似たような概念でホテルのロビーを50階までに上げ大きな吹き抜け空間のある高級なホテル、88階建ての超高層を設計した。

の設計した超高層ビルは、もっとコンプレックスで、未来都市を想像し、10階分ほどの下層の商業施設とも連結しその複合建築物の中で全ての生活が出来ることを意図して設計した。私のプレゼンテーションは、大きな図面が20枚にもなった。それに、100枚近い小さなフリーハンドのスケッチも展示させてくれた。そのスケッチのプロセスを見ていくと、私がどのようにして設計していったかが、よく分かってもらえたと思う。建物の模型を含めて、これら設計図、スケッチ等、徹夜の連続で作りに上げた作品である。「門前の小僧習わぬ経を読む」とでも言うのか、なおみは図面描きや模型造りの手伝いをしてくれた。

学生4人分の展示スペースに、私の作品だけでいっぱいになってしまった。私のプレゼンテーションには、多くの有名な建築家が建築審査に来てくれた。また多くの学生達も集まってきた。私は“I have a dream!”のセリフで、プレゼンテーションを始めた。この作品には、今迄の私の経験と、イェール大学で学んだすべての知識を注ぎこんだ。そして、いつか、私はこの様な建物を設計して、どこかに建てたいと思っている。それが、私の夢である、と話した。学生1人のプレゼンテーションは、20分程であったが、特別のはからいで私には40分もの時間をくれた。たいへん良い評価であった。このプレゼンテーションが終わった後、同じクラスの友人達が私のところに来て、「コングラッチュレーション、クニオ、君の作品が一番良かったヨ」と言ってくれた。特にウィリアム・マクドナルド(シーグラム財閥の息子)は、



スタディー模型

パークアベニューの北側からのビュー





イエール大学大学院卒業式
これも夢のひとつとなった日。

“卒業設計賞のヨーロッパ建築の研修旅行賞は、君のものだ”と言ってくれた。彼自身も良い作品を卒業設計にしていた。彼は、後にアメリカで有名な建築家になった。又、トルコからの留学生のファルクも、大変素晴らしい作品を設計していた。彼か私か、どちらかが卒業設計賞を受賞するだろう、と学生の間では噂された。私は自信過剰のこともあった。しかし、彼も私も受賞できなかった。後日、発表された賞の受賞者は、とても受賞するとは思えないような作品を設計した雄弁家の可愛い女子学生だった。私は卒業設計賞をもらおうとして、設計したのではない。自分の意図したこと、経験、知識、デザインセンス等のすべてを注ぎこんだ集大成の作品を創ろうとしたのである。このプロジェクトを設計することで、大きな夢をつくることが出来たのだ。私は大変満足していた。

1976年5月に、私は、イエール大学の大学院を卒業することが出来た。それもだいぶ良い成績である。私は嬉しかった。それにしても、ヨーロッパ旅行はしてみたい。リチャード・マイヤーや、ジェームス・スターリングに、“世界の良い建築や街を見てまわれ、”と言われた。ヨーロッパの建築視察の旅は、イエール大学の大学院で学ぶのと同じ様に、私にとって大事なことの様な気がした。しかし、行きたいが金がない。やっとのことで授業料も支払うことができたのだ。それに結婚してから3年近くになるが、一度も里帰りをしていない。ヨーロッパの建築視察の旅はいつか出来るだろうし、彼女の為には帰国することが先決かと思った。



しかし、今行かないと“鉄は熱いうちに打て”と言う若い時の修行のチャンスを失う気がした。どちらにしても金がなければ、日本にもヨーロッパにも行けない。しかし、ラッキーにも就学中、アルバイトして働いていたニューヘブンのTPA設計事務所で、卒業後フルタイムで働かせてもらうことが出来た。ちょうど運良くエルダリーハウジングの実施設計を短期間で完成することになった。

私が基本設計をした10階建ての集合住宅の建築基本設計の認可が、コネチカット州の保守的な街ダンバリー市の建築課からおりた。そして私が実施設計もすることになったのである。

www.kiparchit.com

エルダリーハウジングの完成予定スケッチ、
この設計の仕事が世界一周の旅費となった。